ハンドラーの彼

工房径

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ハンドラーの彼

【Ｎコード】
Ｎ５７５８Ｚ

【作者名】
工房径

【あらすじ】
茉莉花は３０代の小学校の教員。恋人もなく、忙しい毎日を過ごしていた。バーナードカフェが縁で知り合った巧は、セントバーナードを調教するハンドラー。ふたりは急接近し、ついにイヴに彼のうちで手料理を振る舞うことになるが、ここで緊急事態発生。茉莉花は全く料理が出来ないのだ……。
＊おかげさまで「小説家になろう」投稿１周年を迎え、感謝をこめた記念作品のつもりです。よろしかったら、お楽しみくださいませ！

Good girl

「茉莉花(まりか)さん。いらっしゃいませ。バーナードカフェにようこそ」

レジで茉莉花に声をかけたのは、バリスタの海(かい)だ。茉莉花は幾分くたびれた顔で、それでも彼に笑ってみせる。

ベージュの半コートに茶のロングスカート、ショートブーツ。髪は緩やかなウェーブがかかったセミロングだが、天然なのか、パーマがとれかけなのかわからない有り様。化粧にもあまり気合いは入っていないが、目だけはくりっとして睫毛も長い、とよく言われる。

「海くーん、こんばんはー。スパイシーバニララテ、トールでお願いしまーす」

甘えたような声で保温マグを渡す。マグはバーナードカフェ専用のマグで、トレードマークのセントバーナードがついている。

「かしこまりました」

海がキッチンに移動すると、茉莉花も移動してその姿を見ようとカウンターに乗り出した。背が高くエプロンがよく似合うハンサムな海は、茉莉花の目の保養だ。おまけによく気が利き、ラテアートまで作れる凄腕の持ち主なのだから。

「お仕事帰りですよね。お疲れですか」

くたびれているときは、甘めの飲み物をたっぷり。茉莉花の習性を見切っている海は、軽やかにラテを作り始める。

「そうなのよう。もうすぐ学校も終わりだし、おまけに慣れないことやってるもんだから」

「慣れないこと？」

海は手を止めず、ミルクを泡立てながら尋ねた。お客とのコミュニケーションを大事にするこのカフェでは、例え作業中でも客の言うことに耳を傾けてくれる。

「ほら、クリスマスが近いでしょ。巧(たくみ)さんに手料理をご馳走しよう

と思って！」
「うわあ、乙女だなあ、茉莉花さん」
わざわざ振り返ってまでからかう海を、にらみつけてやった。
「うるさいわよう、この新婚め！」
「もう、結婚して半年ですよ？」
海は片目をつぶってみせる。
「でも、あっつあつなんでしょ！」
海は、このカフェで知り合った年上の女性と、猛アタックの末結婚した。常連なら誰でも知っている事実だ。
「おかげさまで。このラテなんて目じゃないですよ。どうぞ？」
しゃあしゃあと言ってのける彼が出すラテは、舌が焼けるほど熱かった。

茉莉花は小学校の教員をしている。今担当しているのは2年生。やんちゃな彼らを相手にしていると、いつも知力体力共に限界だ。仕事が終わるとどっと疲れて泥のように眠る。いつも元気な茉莉花先生が、仕事を離れると背中を丸めて足を引きずるようにとぼとぼ歩いているなんて、誰が信じるだろう。
そんな茉莉花はある日、出掛けた先の大きなショッピングモールで「チャンピオン・ドッグ大集合」というポスターを見つけた。日時を確認すると、もうすぐここで始まるらしい。元より動物好きの茉莉花は、最前列に陣取ってその様子を眺めた。
それはドッグショーで良い成績を収めた犬を一同に集めたチャリティ・ショーだった。ドッグショーとは、純血犬種だけを集めて、その種の中でいかに素晴らしい犬かを競う大会なのだという。確かに毛並みもつややかで美しい犬ばかり。飼い主がリードを引き大勢でトラックを走る姿は圧巻だった。アジリティという障害物競技を華麗にこなす犬もいる。
その中に、大きなセントバーナードがいた。堂々とした体躯のわ

りに、身軽に障害物を飛び越え、会場の注目を集めている。その犬を扱っていたのが、巧だった。
年のころは茉莉花と同じ３０代くらいか。チェックのシャツにジーンズ、ロングブーツ。ラフな格好なのに、長身の彼にはぴたりとはまる。前髪はさらっと長めだが、短めに刈り込まれたうなじは清潔そうで。爽やかな牧場の青年といった印象だ。衣装なのだろうかテンガロンハットを被り、その鍔越しに覗く瞳は、時に厳しく、それでいて犬に対する愛情であふれていた。手をあげて、走って、きびきびとした動作も美しい。
そして何より、そのセントバーナードが命令に従うとほめる、その声に聞き惚れた。

「Ｇｏｏｄ　ｇｉｒｌ（いい娘だ）！」

歯切れのいい発音。よく通るが低く響く、例えるならチェロのような声。
セントバーナードも彼に応えようと、枠をくぐり抜けたり、ひょいと飛び越えたり。遠めに投げられたフリスビーも必死にジャンプしてキャッチする。

「Ｇｏｏｄ　ｇｉｒｌ！」

そう言って頭をなでると、犬も本当に嬉しそうにしっぽを振るのだ。

（私も言われたい）

唐突にそんなことを思った。
学校での自分は、生徒に良くできました、とほめる側だ。しかし実生活では自分が何かを成し遂げたとしても、誰も何も言ってくれ

ない。

「Ｇｏｏｄ　ｇｉｒｌ！」

（その大きな手で、頭を撫でてもらえたら）

そんな倒錯的な想いを振り切るように、茉莉花はぶんぶんと首を振る。

それでもショーが終わるまで、彼とセントバーナードの姿を食い入る様に見つめていた。

「ありがとうございました！　またお越し下さい！」

あっという間にショーは終わった。

茉莉花は名残惜しげに小道具を片付ける巧を目で追う。せめてもの抵抗で、彼の傍にある募金箱にありったけの小銭をゆっくり入れた。

「ありがとうございます」

目が合った彼は、にこやかに礼を言う。間近で聞く声もやっぱりよく響くいい声だ。ときめいた茉莉花は少女のように手を胸に当てる。

（なにか、話したい）

しかしここは募金箱の前。後ろも詰まっていて、いつまでも留まっているわけにもいかない。

「あの……とってもすてきでした！」

と言い捨て、逃げるようにその場をあとにした。

それでも未練たらしく遠くから観察していると、ついに彼は床に置いていたトートバッグに手をかける。

（あ、行っちゃう）

かといって、引き留めるほどの勇気も自信もない。３０を過ぎ、教師である自分の立場も踏み出す一歩の邪魔をする。

（こうして出会いがなくなっていくわけよね）

ため息をつきながら、彼の姿を見送ろうとした。すると、
「あ」
彼がトートバッグを持ち上げた弾みで、赤い筒状の物がこぼれ落ちる。それはころころと茉莉花の足元に転がってきて、ショートブーツの爪先で止まった。手に取ってみると、見覚えのあるセントバーナードのマークがついた保温マグ。
「すみません！　ありがとうございます」
巧はすぐに駆けてきて、ぺこりと礼をした。
「これ、バーナードカフェの……」
茉莉花が無意識に呟くと、巧の目尻がくしゃっと緩み、口元もほころんで。
「バーナードカフェ、ご存じですか？　はじめはね、こいつを飼っているんで、セントバーナードのマークに惹かれて店に入ったんですけどね。珈琲も食べ物もおいしくてはまっちゃって、今じゃ常連なんですよ」
彼の脇に座るセントバーナードは、カフェのマークそっくりの顔を上げて嬉しそうに尻尾を振る。自分が話題にされているのをわかっているように。
まさかの共通点にうれしくなって、茉莉花は興奮気味に彼の方に身を乗り出した。
「私も同じマグもってるんです！　自宅の近くなんで、よく行くんですよ！　今の季節だとスパイシー・バニラ・ラテがお気に入りで。寒くて疲れたときは甘い物が身に沁みるっていうか！　昨日もたっぷり飲んできたばかりなんですっ！……って、あ！」
つい大きくなった声に、周りの人が振り返る。
（は、恥ずかしい！　やだ、どうしよう）
赤くなってもじもじする茉莉花に、彼の穏やかな声が降ってきた。
「……僕も今朝、飲みましたよ。あれ、おいしいですよね」
ふと見上げれば、柔らかな微笑みに出会う。彼が茉莉花に向けている眼差しは、包み込むようにやさしくて。

すとん。

それはもう、ものの見事に。

茉莉花は恋に落ちた。

熱心に話をする茉莉花に巧は名刺をくれた。そこには彼の職業と所属している団体なども書かれている。

ハンドラー。

それが彼の職業の名前だった。動物トレーナーだと思っていたら、違うのだという。

「同じ犬種が集まるドッグショーで、いかにその犬の魅力を最大限に引き出すか、っていうのが僕の仕事。訓練もするし、本番でハンドリング、つまり引き回したり、競技をさせたり。立ち姿ひとつにも、美しく見せるにはリードの弾き方とかいろいろコツがあってね。僕はセントバーナード専門」

「詳しいことはわからないけど、この子はすっごく目立ってましたね。お利口だし、身体のわりに機敏だし」

茉莉花も犬の背中を撫でさせてもらう。

「まあね。この子は僕個人の飼い犬なんだけど、セントバーナードでここまでアジリティができる犬はそういないと思う。そのかわり、ハンドリングする僕のほうも相当な運動量だよ。筋肉もつくから、ジムに行く必要なんかないくらい」

確かに、シャツの上からでも肩や腕の筋肉の張りがわかる。ついまじまじと見てしまい、恥ずかしくなって話題を変えた。

「この子の名前は何ていうんですか？」

「フォルテっていうんだ。子犬の時から鳴き声だけは他の兄弟より大きくてね、それでフォルテ。これでも女の子だよ」

彼は自慢げに愛犬の首元を撫でる。フォルテも安心したように彼を見上げて。

（やっぱいいなあ）
犬に嫉妬している自分に苦笑する。
「今日みたいなショーはよくあるんですか」
あわよくば、また会えないかと思ったのだ。
「ドッグショーが最優先だけれど、今日みたいなチャリティショーや施設とか学校の慰問なんかも、頼まれればやることにしてる。もう12月だから、クリスマスに呼ばれたりね」
（学校の慰問）
茉莉花は、はっとした。
（そうだ。来年、学校で開催される職業体験フェスティバルで、いろんな職業の講師を探してたんだっけ）
職権乱用と思いながらも、これはチャンスだ。駄目元で『是非、講師を』と彼に依頼してみた。
巧は穏やかな顔で頷いて、
「いいよ、僕たちでよかったら。じゃあ、日程とか詳しいことはまたあとで連絡をください。日中は連絡がとりにくいかもしれないから」
と携帯の番号とメルアドも交換してくれるではないか。なんという僥倖！
（ここのところ男っ気なしだった私が、一日のうちにここまで……。これは運命かも）
降って湧いたような恋の予感にうっとりと浸る。
「じゃ、またね」
そんな茉莉花を残し、巧は手を振りながらフォルテと共に颯爽と帰って行った。

イヴのご予定は？

そんなに急ぐこともないのに、茉莉花は校長に掛け合って、ハンドラーの彼を講師に呼ぶことを承諾してもらった。

（『鉄は熱いうちに打て』よ、うん）

職業フェスティバルの日時や概略をさっそく彼にメールする。予定は先だし、連絡するチャンスは多い方がいい。後日詳細を、と思っていたら、メールをした翌日には彼から『直接会って詳しく話が聞きたい』とメールが返ってきた。

待ち合わせは、バーナードカフェ。

連絡を取り合ううち、ふたりは用事がなくともカフェで落ち合うくらいの仲に発展した。バーナードカフェには入り口の近くに飼い主用に犬を繋ぐポールがある。犬のフォルテはさすがに入れないので表に繋ぎ、ふたりだけでカフェに入った。忙しいふたりはなかなか会える日はないが、教師の茉莉花を気遣い、巧は夜や週末にお伺いの連絡をくれた。

「あなたが、あの犬の飼い主さん、ですか？」

ふたりでカフェのブランチをとっている土曜日。

長めの髪をした目鼻立ちのはっきりした男が巧に話しかけてきた。巧とはまた違った、ラテン系のイケメン、といった感じ。

「いらっしゃいませ。いつもありがとうございます。私、オーナーの沢村泰山です」

「ええっ」

この人が。この沿線に数店舗あるカフェのオーナーにしては随分若く見える。いつも見かける眼鏡をかけた店長より年下だろう。

「いやあ、以前から従業員に、『まるで看板犬のようなセントバーナードくんがいる』って聞いてましてね。今日、初めて噂の彼を拝見しました。お邪魔とは思ったのですがご挨拶だけ」

（お邪魔だなんて。ちゃんとカップルに見えるってことかな）
茉莉花は頬を赤らめたが、巧はひと言、オーナーに釘を刺した。
「一応、メスなんです、あの子は」
まるで彼女を男と間違えられた恋人みたい。茉莉花はフォルテにちょっと嫉妬してしまった。それでも明るい気さくなオーナーと話が弾み、『セントバーナードとこのカフェのマグが縁で知り合った』と言うと、彼は顔を綻ばせた。
「このカフェが縁で恋が芽生えたっていう話は、実は結構ありまして。でもそういう話は何度聞いてもいいもんです。従業員にいつも窘められるんですが、私はそういうお話が大好きでしでね。オーナー冥利に尽きるってもんですよ」
恋、という言葉に茉莉花はどきっとした。カフェに誘ってはくれるが、巧からは『好きだ』とも『つきあって』とも言われたことがない。巧の顔をそっと覗き見れば、いつものように穏やかに微笑んでいる。
（否定しないってことは、恋人同士って思っても……いいの？）
どきどきする茉莉花をよそに、男ふたりはバーナードカフェの名前の由来に花を咲かせていた。
「ええっ、セントバーナードとは関係ないんですか」
「あはは、実はそうなんです」
沢村はすみません、と両手を合わせた。
「このカフェは、働く女性向けをコンセプトにしてましてね。深夜残業でお疲れだったり、早朝の仕事の前でも、女性ひとりで入れて、ヘルシーで栄養のある食事も食べられるカフェを目指してるんです。だからミールメニューも多いでしょ。ミールアンドカフェじゃ芸がないし、ガスバーナーのバーナーからとって命名したんですよ。『バーナーとカフェ』転じて『バーナードカフェ』って」
「ふーん、知らなかったなあ」
それでもここのマグがきっかけで、巧と知り合ったのだから、オーナー様々である。ごゆっくり、と挨拶して去っていくオーナーに、

茉莉花はちぎれんばかりに手を振った。
　ふと我に返って巧を見ると、彼はじっとこちらを見据えている。頬杖をついて、まるで身体の中まで透視されてしまいそうな、強い眼差し。
（やだ、はしゃぎすぎたかな。変だった？）
　そんな表情を察したのか、巧は次の瞬間にはいつものような穏やかな笑顔に戻る。茉莉花はほっとした。
「フォルテはここでも有名人だったんですね、って、あ、有名犬かしら」
「？？バーナーって言えば、茉莉花さんは料理する人？」
　突然巧に聞かれてどきっとする。しかも料理の話？
「え、まあ……ぼちぼち？　あんまり上手にはできませんけど」
　ぼちぼち、なんて大嘘だ。茉莉花は家事全般が苦手。なかでも料理はからきしだめだった。以前付き合っていた彼に『味噌汁も作れないの』と三行半を突き付けられた話は、大学の友人たち間ではもはや伝説である。かといって一念発起して料理を学ぶような殊勝な気持ちもなく、ここまで来た。
（所詮それだけの男よ、アイツのために人生を変えるなんてありえない）
　その選択が、かえって料理をトラウマにし、それを自覚しないままに就職。実家暮らしの茉莉花は、毎日の食事はもちろん、学校の遠足の弁当でさえも母親任せだ。
『いつまでたったらお母さんはお役御免になるのかしらねえ』
　と頭を抱えられている。
　巧は何やら考えていたようだったが、ふっと顔を上げた。
「今度、うちで作ってもらおうかな。ほら僕はフォルテがいるから、なかなかレストランとかに行けないんだよ」
　？？『今度、うちで』
　茉莉花の胸は高鳴った。
（巧さんの家に、呼ばれた！）

彼はひとり暮らしと聞いている。犬のフォルテは一緒かも知れないが、ふたりきりには変わりない。浮かれる茉莉花に、巧はさらに畳み掛ける。
「じゃあさ、さ来週のイヴはどう？　僕の歳になると友達は皆家庭持ちで、イヴに一緒にごはん食べてくれる人がいないんだ」
??イヴ！　そんなとびきりの日に一緒に過ごしてくれるっていうの？
茉莉花の頭の画面一杯に、『キター！』の文字の弾幕が流れる。自慢にもならないが、今までイヴの夜に男性とふたりきりで過ごしたことはない。いきなりのレベルアップに、心臓が闇雲に暴れ出す。
「わたっ、しも、そんなとこです！　予定なんて全っ然！」
さりげなさを装うが、あまりのことに声が震えた。
「よかった！」
巧は満足そうに頷いた。
「お言葉に甘えて、当日ごはん作ってもらってもいい？　ご馳走じゃなくても簡単なものでいいんだ。僕が今住んでるとこは先輩のハンドラーから譲り受けた家でね。彼、料理が趣味だったから、台所の設備や調理道具だけは何でも揃ってるよ」
??しまった！　料理！
茉莉花の頭の中に、ひゅう、と北風が吹いた。

「それで茉莉花さんはお料理を頑張っていると」
海はうんうん、ともっともらしく頷いてみせる。
「イヴまであと一週間、何とか彼に“Ｇｏｏｄ　Ｇｉｒｌ！”って言わせたいとこですよねえ」
その言葉にはっとした。
「“Ｇｏｏｄ　Ｇｉｒｌ！”って言われたいなんて、私、海くんに話したっけ？」
真っ赤になって慌てる茉莉花に、海の呆れたような声が落ちてき

た。
「こないだ飲み会の帰りに寄ってくださったときに何度も言ってましたよ。忘れたんですか？　ま、頑張ってください。料理は愛情ですから」
茉莉花は海をにらみつけた。
「もう！　愛情だけで料理がうまくなるんだったら、今ごろ私は鉄人シェフよ」
絶品イタリアンを作る料理人の妻を持つ彼には、茉莉花の苦労は到底わかるまい。
「巧さんたら『調理器具は何でも揃ってる』って言うの。オーブンもアメリカ式の大きなビルドインのがあるって！　味噌汁も作れない私に七面鳥やケーキを焼けと？」
「まさか」
海が一笑に付すが、茉莉花は大まじめだ。
「でもね、ここでびびっちゃ女がすたるわ。買ったわよ、練習用も含めて七面鳥３羽！　冷凍庫七面鳥だらけ！」
「３羽……」
唖然とする海に、指を差して宣言する。
「みてらっしゃい！　絶対すてきなイヴにしてやるんだから！」

そしてイヴの当日。約束の１４時に彼の家のチャイムを鳴らした。巧はフォルテと児童施設の慰問で出かけると言うので、早めの時間に約束をしたのだ。リビング・ダイニング形式の部屋で、ソファやテレビのあるくつろぎスペースと、食卓らしいテーブルセット、そして奥にキッチンがあった。簡単に使い方の説明を受けたが、余り料理はしない、と彼が言っていた話は本当のようで、オーブンもしばらく使った形跡はなさそうでほっとする。
「仕事のあと買い物してくるけど、遅くても7時には帰れると思うから。キッチンだけじゃなく自由になんでも使って。暇だったらそ

こら辺のＤＶＤ見るなり本読むなり、好きにしてていいから」
とてもそんな暇はないと思ったが、素直に頷いておいた。
「あ、帰るときメールか電話、くださいね？」
料理を作ったあとは、できたら着替えて彼を出迎えたい。おびただしい料理の材料とともに、メイク道具や決めすぎない程度のワンピースもちゃんと持ってきた。彼が帰る前に着替なければ。
「了解です」
彼はにっこり笑うと、フォルテと一緒に車で出かけていった。

オーブン料理は慎重に

「さてと」
茉莉花は、彼の部屋を見回した。
フォルテと一緒に生活しているせいか、あまり余計なものを置いていないシンプルな部屋だ。床はフローリングで隅のほうにケージやラグが置いてあって、そこがフォルテのスペースなのだろう。彼の物らしいぼろぼろになったぬいぐるみやボール、きれいになった食器などが置かれていて、思わず笑みがこぼれる。
どうやら彼にこの家を譲ったハンドラーは外国人らしく、暖炉がある欧米風のゆったりとした作りだ。犬を考慮してのことだろう、高いところにいくつも棚があり、そのあちこちにガラスのキャンドル・ホルダーが飾ってあった。
（暖炉にキャンドル。私んちの純和風とはえらい違いだなあ）
ドッグショーのときのものだろうか、巧とフォルテが誇らしげに微笑む写真が、フレームに入って幾つも並んでいる。当然のようにいつも隣に陣取っているフォルテがうらやましい。
（フォルテがいる限り、イヴのディナーとはいえ、あんまりロマンティックな状況にはならないんだろうなあ。最強のライバルだわ）
とはいえ、母親には
『友達とのクリスマスパーティで、もしかしたら、泊まりになるかも』
と言ってあった。荷物には下着とかわいいナイトウェアも忍ばせてある。アラサーにもなると、こんなところだけは用意周到なのだった。
（ま、無駄になる可能性は大だけど）
茉莉花は気を取り直してエプロンをつけ、料理の支度を始めた。
サラダは家で野菜を切り、お手製のドレッシングを作ってきた。

これはさすがの茉莉花でもできる。
問題は七面鳥とケーキ。
焼き時間が少ないケーキからとりかかった。まずは土台のスポンジケーキから。茉莉花は鞄から一冊のファイルをとりだした。インターネットのレシピサイトで調べプリントアウトした資料がきちんと閉じられている。１頁目は『誰でも簡単！　しっとりふわっふわ！　のスポンジケーキ』。さっそく卵を割り、白身を泡立てる。ケーキは食べる専門の茉莉花がハンドミキサーなど持っているはずもなく、これもインターネットで調べた『おしえてＱ＆ａｍｐ；Ａハンドミキサーなしでメレンゲを作るとき』を参考にした。
「泡立てってめんどくさいなあ。やっぱミキサー買えばよかった。このくらいで砂糖を混ぜるんだっけ」
その記事によると砂糖を入れるときめ細やかな泡になるという。
「よく分かんないけど、ま、この辺で」
泡立ちは今ひとつだったが、他の材料と共に混ぜ込んで型に流す。これをオーブンに入れればいいのだが。
「へっ？」
温度調整をしようとスイッチを入れると、浮かび上がった数字に仰天した。

『２５０。Ｆ』。

「に、にひゃくごじゅう？」
レシピには１７０度で焼けと書いてある。ダイヤルを回してみても２５０度が最低で、どんどん数字は大きくなるばかり。ついには５００。Ｆになり、茉莉花はパニックになった。
「どうしよう！」
しかし茉莉花も教師のはしくれ。そのうち思い当たった。
『。Ｆ』。ファーレンハイトだ。
アメリカ製のオーブンなので、表示が摂氏でなく華氏になってい

るのだった。しかしそれがわかっても換算の仕方がわからない。自分のＰＣを持ってくるんだった、と思っても後の祭り。巧のＰＣを借りようと家の中を捜索する。

「あった」

ノート型のＰＣが机の上に置いてある。彼の机は仕事関係の書類や本が積まれていた。ゴミ箱に入りそこねたのか、床にメモが落ちていて拾い上げる。見ると、ボールペンで箇条書きにされたリストだった。

『ケンネル・ボブに確認のｔｅｌ
風呂・寝室掃除、ベッドメイキング
ドライフード　×２
牛乳、卵、パン、ハム、レタス、トマト
Ｔ’Ｓ　Ｄｅｌｉｃａ、ベーカリー、シャノアール
フレンチロースト２００ｇ
１４時　茉莉花さん
１４時半　“子供の家”』

『１４時　茉莉花さん』。日常生活のメモの中に、自分の名前が記されているのが、たまらなくうれしかった。俄然やる気になってくる。

しかし華氏を摂氏に換算する記事を見つけるためと開けようしたＰＣは、セキュリティロックがかかっていて開かない。

「もう！」

仕方なくキッチンにもどり、低い温度で１５分焼くことにした。レシピには３０分と書いてあったので、中程で様子を見てみよう、という作戦だ。その間に生クリームに砂糖を入れて泡立てるが、これもハンドミキサーがないため一苦労。いつまで経っても液体のままのクリームと格闘しているうち、タイマーが鳴った。

「どれどれ」

中を覗いてみると、型の中のケーキの生地は入れたときと同じ高さ。全く膨らんでいない。きっと温度が弱いのだろうと、さらに温度を上げて１５分。生クリームをしゃかりきになって掻き回していると。

「ん？　焦げ臭い？」

オーブンから煙が上がっている。慌ててドアを開けてみると、白い煙が茉莉花を包む。

「……うぷ！」

トレイを引き出すと、表面が真っ黒に焦げただけで全く高さの変わらない代物が、型の中に鎮座していた。

「あーあ、『誰でも簡単』ってのは嘘？」

テーブルに並べた苺と泡立っていないままの生クリームを恨めしげに見る。

「仕方ない、ケーキはいっか、所詮デザートだし。七面鳥さえ食べられれば」

このくらいでへこたれないのが茉莉花の長所でもあり、短所でもあった。実際落ち込んでいる暇もなく、今度はターキーに取りかかる。ターキーを焼くのは４時間もかかるのだ。家で下ごしらえはしてきてあり、大きな肉の中にはひき肉や香草、米などを炒めた具がぱんぱんに詰まっている。米が入っているので、ごはんを炊いたりパンを用意しなくてしなくていいのもこのレシピを選んだ一因だ。

レシピに書いてあったオーブンの温度は１９０度。オーブンを使ったことがない茉莉花は、それが他の調理と比べて、高いのか低いのかわからない。しかしケーキよりは強火だろうと、中程の温度にして今度は３０分。

「生焼けよりは、よく焼けたほうがいいもんね」

ターキーの詰め物の中にはチキンスープも混ぜ込んであり、３０分おきに肉からたっぷり流れ出てくるスープを受け皿からすくって回しかけ、４時間じっくり焼かなくてはならない。これは家でなんとか成功しているので自信があった。

３０分経ち、オーブンを開ける。今のところうまくいっているように見えた。しかし2回目には、焼き色がなんだか怪しくなってくる。焦げそうだ。
「まずい」
ケーキの二の舞いは避けたい。慌てて低い温度にする。その後も３０分で回しかけていたが、オーブンからじゅじゅじゅじゅ、と大きな音がした。開けてみると肉から溢れ出したスープがオーブン内にこぼれている。
（しまった。思ったより受け皿が浅いんだ！）
慌ててオーブンを開け、布巾を持つ手を中に突っ込んでしまった。
「あっちい！」
手の甲がオーブンの内壁に触れてしまう。飛び退いた瞬間、身体がテーブルに当たる。泡立て途中で液体のままだった生クリームのボールが、がしゃんと倒れた。
「きゃあ！」
エプロンを着ていたにも関わらず、シャツとジーンズまで生クリームまみれ。それでも『火傷はすぐ冷やさなければ』という頭があり、クリームをかぶったまま蛇口を一杯にひねり手を突っ込んだ。水が跳ねるのも構わず、じゃぶじゃぶと盛大にかけていると、携帯が鳴った。
「ええっ！　このタイミング？」
時計を見ればまだ6時前。こんなに早く連絡が？　茉莉花は手を拭いて電話をとる。やはり巧だった。
「ごめんね。料理中だった？」
いつものような穏やかな声。そんな彼のきれいなキッチンは飛び散った水と生クリームで台無しだ。茉莉花は泣きそうになりながら、小さな声で、はい、と答えた。
「僕、今買い物中なんだけど、うっかり生鮮食品を先に買っちゃっ

て。今からそっちによるけどいいかな。冷蔵庫に詰めたらまた外出するから、料理は急がなくていいよ」
??冷蔵庫！
それは取りも直さず、キッチンに入るということだ。まずいと思ったが断るわけにも行かない。電話を切った後、急いでオーブンを閉め、床を拭く。
（まずい、まずい！）
しゃかりきになって床を拭き終わった瞬間、チャイムが鳴った。
（ぎりぎりセーフ！）
「おかえりなさーい」
仕事から帰ってきたのだから、とパニック状態の胸の内を隠し、せめてもの笑顔で出迎えた。
「ただいま、茉莉花さん……って、どうしたの？」
巧は茉莉花を見るなり目を見張った。あまりにもまじまじと見るので、玄関の姿見に自分を映してみる。
??ぎゃあ！
そこにいる茉莉花は惨憺たる有り様であった。髪や顔には小麦粉がつき、エプロンは水でびしょ濡れ、シャツやジーンズの左脇は生クリームの白い大きな染みが浮かんでいる。
「ごめんなさい、火傷して、慌てちゃって！」
「火傷したの？　どこ！」
巧は茉莉花の全身に視線を這わせた。
「大したことないんです」
「見せて」
有無を言わさぬ口調におずおず手を出す。巧はその手を自分の目の前まで持っていき、赤くなった皮膚を見て顔をしかめた。その手を取ったまま、黙って居間に引っ張っていく。
「座って」
いつもにこやかな彼が口数も少ない。救急箱を持ってくると軟膏を塗られ、ガーゼに透明なシートをかぶせた絆創膏を貼ってくれる。

「これで濡れても大丈夫だから」
「え？」
「お風呂、入ってきなよ」
今度は風呂に連行しようとする。茉莉花は必死で抵抗した。
「え、あ、いや、まだ、料理途中だし。ってあ、ターキー！」
そういえばターキーはオーブンの中。火傷と巧の帰宅騒ぎで、３０分ごとの観察を忘れてしまっていた。
「あの、ここで待ってて！」
茉莉花は急いでキッチンに駆け込んだ。
明らかに焦げ臭い。
オーブンを開けると。
「……」
悪夢、再び。見るも無惨に焦げた、黒光りした小山のようなターキーが。
「嘘……ターキーだけはうまくいくと思ってたのに」
３羽も買ったターキー。中に詰める詰め物も大量に作り、ぎゅうぎゅう詰めて。腕が筋肉痛になり、もうターキーは食べたくないと家族に言われながら、それでも練習を重ねた。
？？すべては今宵のイヴ、一緒に過ごしてくれる巧のために。

「もう、嫌」
ボールや食器が重なり、生クリームや粉、調味料が飛び散った調理台。なのに食べられるものがサラダしかないなんて。
「茉莉花さん？」
巧の声がする。
（もう、ごまかせない）
茉莉花は観念した。
入ってきた巧はオーブンの前で座り込んでいる茉莉花を見つけた。開けっ放しのオーブンからは丸焦げの七面鳥。キッチンを見回し、

巧はふう、とため息をつく。

？？あきれちゃった？

茉莉花の胸に、味噌汁の一件が蘇る。

？？私、また料理でふられるの？

二転三転

「……茉莉花さん」
目の前に、大きな手が差し出された。
「そんなところにびしょ濡れのまま座ってたら、風邪をひく」
巧はぐい、と茉莉花の手を引っ張って立たせた。
「大丈夫？」
本当に心配そうに目をのぞき込まれて、どきどきした。
「私は大丈夫だけど……お料理が……」
オーブンから覗く黒い塊を見て、ああ、と頷いた。
「ごめん、オーブンの使い方がわからなかったんでしょう？　ここに華氏から摂氏に換算するメモを貼っといたんだけど、言うの忘れてた」
彼は冷蔵庫にマグネットで貼ってあるメモを指さした。
「ええっ」
何度も冷蔵庫を開け閉めしていたのに、どうして気付かなかったのだろう。
「謝ってすむことじゃないけど、本当にごめん。せっかくがんばって作ってくれたのに。食べ物、あと何があるの？」
まるで迷子の子供にお母さんの特徴を聞くように、巧は身をかがめて茉莉花に聞く。
「あの……サラダと……」
「ん？」
このまま消えてしまいたい。
「……サラダです」
見得を張っても無い袖は振れぬ。
俯く茉莉花の頭を、巧はぽんぽんと叩いた。
？？温かくて、おっきな手。
ずっと憧れてた。

犬のフォルテみたいに、頭を撫でられて、

『Ｇｏｏｄ　ｇｉｒｌ』

そう言われたかったのに。

「……そっか。わかった。あとは僕が用意するから」

??大好きな声。低めで穏やかなのに、胸の底まで響くような。

でもその声で彼が言ったのは、あきらめの言葉。

（もう、だめだ。なにもかも台無し）

情けなくて、ついに涙の堰が切れた。

（ああ、ここで泣くなんて最悪だよ、茉莉花！　巧さんが困っちゃうから、早く泣き止まなくちゃ！）

ぼろぼろと泣く茉莉花に、巧はハンカチを貸してくれた。

「とにかくさ、濡れてるからお風呂入っておいで。あ、そっか、着替えがいるよね。僕のでよければ……」

服を取りに行こうとする巧のシャツの袖を引っ張った。

「あの、あります……お料理で汚れると、思ったから、持って来てて……」

着替えなんか用意する暇があるなら、もっと料理のことに気遣えばよかったのに。茉莉花は浮かれていた自分が恥ずかしくて下を向く。

「そう、じゃあすぐ沸くから、ゆっくり湯船に入ってあったまってね。慌てないでちゃんと髪も乾かすんだよ？　」

茉莉花の行動を見切ったような台詞だ。巧は台所にある給湯システムのボタンを押した。タオルなどを用意してくれたのか、浴室に行って戻ってくる。

「僕はもうちょっと寄るところもあるし、のんびりしてて？　じゃ、

行ってくるね」
ふんわり微笑むと、また頭に手をぽんと置いて出掛けていった。
（怒って、なかった？）
茉莉花はぬくもりの残る自分の頭に手をあてた。
（オーブンのことで、料理の失敗は自分だけのせいだと思っているのかな）
茉莉花は申し訳ないと思いながら、巧の優しさに胸を打たれていた。
（それにしても余裕ある対応だわ。今までつきあってきた男の子たちとは違う、大人の男って感じ？　ほんといい人だなあ）
彼が出ていった玄関の方を見ながら、茉莉花は、ほう、と切ない息を吐いた。

しかしいつまでも余韻に浸っている場合ではない。
風呂が沸くまで台所の洗い物をすませると、浴室に足を踏み入れる。
他人のバスルーム、しかも巧がいつも使っていると思うと、無駄にどきどきしてしまう。
（ちゃんとした恋人にもなってないのに、お風呂だなんてハードル上がりすぎ）
脱衣所もこぎれいに片付いていて、脱衣カゴに茉莉花用らしきバスタオルも用意してあった。新品のように見えるが柔軟剤の良い香りがする。
その脇にはドライヤーと封を切っていない新しい歯ブラシが並べてあるし、足ふきマットも新しそうだ。
（来客用のタオルや歯ブラシがさっと出てくるなんて、まめな人だなあ。どうしよ、ますますあきれられちゃうかも）
仕事にかまけて実家で傍若無人に振る舞っている茉莉花は、自分の生活を顧みて、顔をしかめた。しかしまたいつ彼が帰ってくるか分からないので、とにかく風呂に入ることにした。

湯船に入ってみると、なるほど緊張と冷えで身体ががちがちになっていたのがわかる。言われたとおりゆっくり温まって髪を乾かした。

風呂から上がって腕時計を見ると、すでに1時間以上は経過している。

慌ててニットワンピースを頭から被った。ピンクベージュで、鎖骨が見えるくらいに開いた襟元と膝までの裾が太いリブ編みになっている。身体に沿ったフェミニンなシルエットが気に入っていた。

（アクセサリーも何もないけど、しょうがないよね。急がなきゃ）

ぱぱっとひと通りのメイクを施して鏡に上半身を映した。

髪こそ乾かしたばかりでふんわりつやつやだが、いつもの手抜きナチュラル風メイクにシンプルなワンピースをすとんと着ただけの自分がいる。イヴを好きな男性と過ごそうという気合いは、残念ながらあまり感じられない。

（うう。でも、あまり決めすぎてもおかしいし！　着替えを持っていただけグッジョブよ、茉莉花！）

相変わらずのプラス思考でバスルームを出た。

玄関の脇を通ると彼の靴がある。

帰ってきてるんだ。

脱いだ服を慌てて紙袋に押し込み、居間のドアを開けた。

「え？」

薄暗い中に、キャンドルの灯が見える。部屋のあちこちに点されたそれにはアロマキャンドルも入っているのだろうか、仄かに清涼なハーブの香りがする。

目をこらすと、テーブルの上にもキャンドルが飾られ、茉莉花の作ったサラダが中央に置いてある。赤と緑、それぞれ1枚ずつひかれたランチョンマットの上には、ワイングラスに、カトラリー。それだけではない。ローストチキンやビーフシチュー、星やツリーを

象ったパンも籠に盛られている。
「これって……」
「あ、あったまった？　いろいろ買ってきたよ。デザートもあるし」
巧はキッチンにいて、冷蔵庫にケーキの箱をしまうところだった。箱の包装紙はシルバーグレイの地に赤の文字、リボンは黒の細いベルベット、というシックな包装。冷蔵庫の灯りに照らされて、包装紙に書いてある赤い文字が見える。
“ｃｈａｔ　ｎｏｉｒ”……シャノアール。
（あれ、どこかで……）
茉莉花は首を傾げた。そのときふっと浮かんだ箇条書きの文字。
『Ｔ’Ｓ　Ｄｅｌｉｃａ、ベーカリー、シャノアール』
巧の机の下に落ちていたあのメモ。
（え、ということは）
茉莉花は食卓を見回した。急に用意したにしては料理やパンもクリスマス仕様、完璧に揃いすぎているディナー。茉莉花が来る前に書かれた、あのメモ。
（まさか私の失敗を見越して、予約してた？　そう言えば、バーナードカフェの海くんには、七面鳥のこととか話してた。もしかして料理がだめなこと、はじめからバレてた？）
絶望の鐘が、がんがんと頭の中で鳴り響く。
呆然としている茉莉花に気付いた巧は、ああ、と微笑んだ。
「びっくりした？　実はこれね、前から予約したのをつい2日前まで忘れてて、キャンセルできなかった分なんだ。どうしようかと思ってたんだけど、役に立って良かった」
？？前から予約？
茉莉花との約束は、はじめから手料理という話だったはずだ。

ぴったり、ふたり分のイヴ用の食事。揺れるキャンドル。ロマンティックなディナー。

茉莉花の胸につうっと冷たい雫が伝う。

??もしかして、私、誰かの代役?

一緒に過ごすはずの相手に振られて、私に声をかけた?

ずっと恋人がいなかった茉莉花。まめで優しくて洗練された巧。

偶然の出会いでとんとん拍子にことが進むより、誰かのバーターであるほうがよほど現実的な気がした。

「座って?」

巧は茉莉花の動揺に気付かず、椅子を引いてくれる。間近で茉莉花の姿を見た巧は微笑んで、

「かわいいの着てるんだね……よく、似合ってる」

と目を細めた。普段ならどれほど舞い上がっただろう。しかしその言葉も他の誰かにかけるはずだったのだ、と思ったら、嬉しくない。

一方の巧はさかんにワインをすすめたり、いろんな話題を振ってくる。おいしそうな食事も、料理の失敗と相まって、砂を噛むようだ。かちゃかちゃと食器の音だけがやけに大きく聞こえた。

「今夜は、おとなしいね」

あらかた食事も済むころ、巧が言う言葉にはっと顔を上げる。向かいに座った巧は肘をついて乗り出すようにして茉莉花を見る。その甘い表情。自分だけを見ているなら、どんなに嬉しかったことか。

「どうしたの? 料理のこと気にしてるの? あれは僕が悪かったんだし、気にしないで。サラダ、とってもおいしかったよ」

巧は茉莉花の手作りドレッシングが入った瓶を振る。茉莉花はドレッシングには自信があった。以前ダイエットしたとき、サラダば

かり食べていて、味に飽きてドレッシングに凝ったことがあったのだ。
「あ、ありが……」
お礼を言おうと思ったら、言葉より先に涙が出た。
「あれ、あれっ」
そう言えばさっき借りたハンカチどこやったんだろう。
「茉莉花さん」
慌てる茉莉花に、巧が近くの部屋からタオルを持って来てくれた。これもバスタオルと同じ清々しい柔軟剤の香りがして、茉莉花を慰める。
「ほんとに気にしないで？　僕は……茉莉花さんといるだけで楽しいんだから」
ちょっと照れくさそうに言う台詞も、茉莉花の心には響かない。しばらく巧は茉莉花の様子を見ていたが、
「場所を変えようか」
とソファを手で示した。
「ごちそうさま。今、デザートと珈琲、用意するから。そっちで食べよう。待ってて、ね？」
席を立つと、茉莉花の脇に回り込み、肩を支えて立ち上がるのを手伝ってくれる。
「もう、泣かないで？」
顔を覗き込む巧は、ワインのせいか、幾分頬を赤らめ、とろんとした目をしている。色っぽくて、思わず目を反らした。
（勘違いしたら、あとが辛くなる）
顔を伏せる茉莉花に、巧は単に料理の失敗が堪えていると思ったのか、ぽんぽんと頭をなぐさめるように叩いてキッチンに下がった。

ハンドラーは、彼

ひく、ひく、としゃくり上げながら、ふと顔を上げると、フォルテと巧が映った写真が目に入る。ふさふさの毛並みを、抱きしめるようにして微笑む巧。

（所詮、フォルテには敵わなかったなあ）

幸せそうなふたりの姿を恨めしげに眺めていたが、そのとき、はた、と思い立った。

??そうだ、フォルテは？

自分のことで必死だった茉莉花は、ここにセントバーナードのフォルテがいないことに、今、気が付いた。きょろきょろ見回したが、あのケージやラグがある場所にも彼女はいない。

（そもそもフォルテがいるから、家でディナー、ということじゃなかった？）

「巧さん」

キッチンに声をかける。

「フォルテは？　どこにいるの？」

「今ごろ気付いた？」

巧は笑いながら、珈琲とケーキの箱を運んできた。

ソファに腰掛け、細い黒のベルベットのリボンを解いて箱を開けると、山型のフルーツケーキのようなものが出てきた。取り出したあと、巧は上から小瓶に入った液体をかける。ぷん、と香る芳醇な香り。これはブランデイ？

「クリスマス・プディングだよ。ここのはね、本場のものよりこってりしてなくて、おいしいんだ」

巧は茉莉花の質問に答えない。急に不安になってきた。
「ねえ、フォルテはどうしたの？　けがでもしたの？」
巧と待ち合わせるのは、フォルテを連れて行ける場所ばかり。
大型犬だから仕方ないけど、常に茉莉花よりフォルテ優先だった。
嫉妬するほどいつも巧と一緒だった、相棒のようなセントバーナード。
そのフォルテがいないなんて、何があったのだろう。
嫌な汗が流れる。
（なぜすぐに答えてくれないの）
まさか、まさか。
青くなっている茉莉花に気付いて、巧が、ああ、ごめん、と微笑んだ。
「フォルテなら大丈夫。怪我も何にもしてない、元気だよ。知り合いのペットショップで預かってもらったんだ。今のシーズンは、旅行とかディナーとかで混んでて、なかなか預かってもらえないからね。早くに予約しといてよかったよ」
巧の話を聞いても、フォルテを預ける理由が納得いかない。
「元気ならどうしてここに連れてこないんですか？　大体、『予約』って？　今夜はそもそも『フォルテがいるから巧さんちでごはん』ってことだったでしょう？」
巧は、まいった、というように顔をしかめる。
「茉莉花さん。本当に、わからないの？　それともわからないふり、してる？」
彼は長い柄のマッチを擦って火をつける。
ぼっと火がついて、薄闇の中ケーキが青い炎で包まれた。
「君と、ふたりっきりになりたいからに……決まってるでしょ」

キャンドルとケーキの炎に照らされて、巧の瞳は煌々と輝く。
膝の上に置いた茉莉花の手に、そっと彼の手が重なった。茉莉花の指の間を櫛削るように指を入れ、ぎゅっと握りこむ。
「ごめん。僕もはじめはフォルテと一緒に、買ってきたものでディナーにしようと思ってたんだ。そのつもりで、1か月も前からいろいろ予約を入れてたんだよ？　でもさ、フォルテに邪魔されるのも癪だし、ごはん作ってくれるっていう口実でもないと、家に誘いにくいかなって思ってさ。苦しい男の事情も察してよ」
巧はすねたように言って頬を赤らめた。
（え？　どういうこと？）
茉莉花はパニックになった。
（この状況は何？　どんな女でもいいからクリスマスを過ごしたかったってこと？）
寂しさを紛らわすために手頃な女を口説くような、ひどい男だと思いたくない。
「あの、私、こう見えても、誰かの代わりをするほど落ちぶれてはいません！」
茉莉花は崩れ落ちそうな気持ちを精一杯立て直す。
「は？」
「イヴにひとりが嫌なら、他を当たってください。巧さんなら他に女の子がいくらでも……」
「ちょっと待った。『他に』って……どういうこと？」
さらに低くこもった巧の声に遮られた。幾分怒ったような鋭い眼差しまで向けられる。怒りたいのはこっちだ、と茉莉花は思う。
「だから！　ディナーも、ケーキも！　私は、巧さんが本当にイヴを過ごしたかった人の代わりなんでしょっ！」
大声で叫び終えた瞬間、後悔した。
（黙っていればこのまま巧さんと過ごすことも出来たのに。馬鹿な

茉莉花）
唇を噛んで俯くと、巧に握られた自分の手が目に入る。その手を抜こうと思って引くと、さらにぎゅっと巧が力をこめた。何のつもりだ、と憤慨して顔を上げると、真剣な瞳と出会う。

「代わりって、何？」

巧はずい、と顔を近づける。

「ねえ、代わりって？」

答えなければ許さないオーラを漲らせて、巧は茉莉花を追いつめた。彼を責めたくなんかないのに。茉莉花は仕方なく口を開く。
「だって……ずっと前から予約してあったんでしょ？」
「そうだよ？」
近づく身体を避けようと手で押しのけても、フォルテとのトレーニングで鍛え上げられた腕や胸はびくともしない。
「私、見ちゃったの、あのメモ！」
「メモ？」
「机の下に落ちてた。お掃除とか、買い物のリストとか、お店の名前が書いてあって！　ケーキ屋さんの名前で気付いたわ。ごはん作ってって言いながら、ふたり分のディナーを完璧に予約してるなんて、おかしいと思ったのよ！　しかも、それが1か月前？　1ヶ月前って言ったら、まだ私と知り合ったころでしょ？　イヴの約束したのは、ほんの2週間前なのに！」
必死で訴える茉莉花に、巧は気まずそうに目を反らした。
「メモ。そうか、なくしたと思ったら……あれを、見たんだ」
「ほら！　そうなんでしょ？」
また涙があふれそうで横を向いた茉莉花の肩を、巧が掴んだ。

「違うよ！　君と過ごしたくて予約したに決まってるだろ！」

ぐい、と正面を向かされた。

「一目惚れだったんだよ！」

巧が吠えた。その声はフォルテより強いフォルテシモ。

「大きな目とくるくるの髪がコッカー・スパニエルみたいでかわいいなって。話してみたら、とっても気さくで楽しいし、仕事熱心で子供たちへの愛情にあふれてて。僕の仕事も、すごくほめてくれたよね。どんどん夢中になって、どうやってふたりっきりになろうか、ずっと考えてた。もうそろそろ１２月だし、誘うならイヴがいいかなって、君の都合も考えないで勝手に決めた。ケーキ屋やデリカテッセンを見て回ったけど、どこも早くしないと予約が一杯になるって煽られて。知り合いのケンネルも『この時期は予約しないとどうなるかわからない』って脅かすから……とりあえず全部予約しちゃったんだよ！」

矢継ぎ早に叫ばれた言葉は、メガトン級の破壊力。茉莉花は目をぱちくりさせた。

「わ、私の、ため？」

「他に誰がいるの？　初めて会ったあの日、ずっと僕とフォルテのこと見ていてくれて、募金箱にありったけの小銭を入れてくれたよね。かわいくて、いじらしくて、どうしても話すきっかけが欲しくなった。これは言いたくなかったんだけどね、実はあのマグもわざと転がしたんだ。まさかバーナードカフェを知ってるとは思わなかったけど。」

？？わざと？　あの出会いは、偶然じゃ、なかったの？

「だって、巧さん、『好き』だなんて1度も……」

突然言われても、にわかには信じられない。

「え？　そうだった？」

巧はきょとんと目を見開く。

「それにしたって、これだけカフェに誘ってアプローチしてるんだから、わかりそうなものだけど？」

「わ、わかるわけないですよ！」

こんなすてきな人が、私に一目惚れなんて誰が信じる？

「そうか……」

巧はふう、と息を吐き茉莉花の肩から手を離す。いつしかクリスマス・プディングの火も消えて。

彼はズボンのポケットに手を入れてソファにもたれ、しばらく考えているふうだった。しかし、ふいに起き上がると、先ほどのケーキの箱を結んでいた黒いベルベットのリボンをすっと取る。

「？」

「じっとしてて」

首に手を回される。彼の温かな指が首筋に触れ、茉莉花はくすぐったさに肩を竦めた。それでも言われたとおりにおとなしくしていると、彼は満足そうに微笑んだ。

「これでよし」

首にチョーカーのように巻かれたリボン。その中心あたり、肌に触れる冷たい感触。

引っ張ってみると、指輪だ。中央に嵌め込まれた石が薄暗い部屋のなかできらきら光って。これって……。

巧はするり、と茉莉花の頬を撫でて、耳元に顔を近づける。

「Ｇｏｏｄ　ｇｉｒｌ」
低い声は少し掠れて。
茉莉花はぴくん、と震えた。
今、なんて？
「Ｇｏｏｄ　ｇｉｒｌ」
今度は正面から。
目を反らすことも許されないような、熱い眼差し。
「言って欲しかったんでしょ。海くんから聞いたんだ」
その笑みは、いつもの爽やかなイメージが一転、男の色香を濃厚に漂わせて。
「君が望むのなら、いくらでも言ってあげる。でも、その前に」
茉莉花の首の後ろ、リボンの結び目の辺りに大きな手を当て、ぐっと顔を近づけた。
「茉莉花、愛してるよ」
唇を指でなぞられる。
「君を手に入れたくて、先回りばかりした僕を許して。泣かせるつもりなんかなかった。本当にごめん」
心臓の音は、トナカイの橇が鳴らす鈴の音より早く。
「僕のために、頑張ってくれてありがとう。君のオーブン料理はまた今度食べさせて？」

ぎくり。それについては、また猛特訓しなければ。
「これは、ステディリングだよ。受け取って……くれる？」
リングに小指を通してちょいちょいと茉莉花の肌をつつく。下から覗き込むような視線でお願いするなんて、ずるい。
「え、だって、そんな。もう……はい」
茉莉花がしどろもどろで言うのを、嬉しそうに見て。
「ね、君は？　僕のこと、どう思ってる？」
「え？　だって海くんからいろいろ聞いてるなら、バレてる……でしょ？」
私のほうこそ、はじめからこんなにアプローチしてたのに。
「ん？　聞いたのは『Ｇｏｏｄ　ｇｉｒｌ』って言われたがってる、ってことだけだよ？　何、他にもあのバリスタに話してた？　妬けるな、もう」
「やだ、そんな」
どうやら七面鳥のことは話してなかったらしい。心の中で海に感謝した。
「誤魔化さないで。君も、ちゃんと、言って」
じっくりと、彼の瞳の熱で、炙られる。
（そうよね、私だって、言って欲しかった）
観念して、深く息を吸った。
ちゃんと声が出るかしら。
「……好き、なの。初めて会った日から、ずっと好きだったの」

巧の目が、きらきらと嬉しそうに輝いて。

「Ｇｏｏｏｏｄ　ｇｉｒｌ」

Ｌの発音は、重なった唇に溶けた。

優しく啄むようなキスは、少しずつ熱を帯びてきて、静かな部屋にリップ音が響く。首の後ろに当てられたままの巧の手に力が入った。唇が捲れるほど強く押しつけられて、息がつけない。もう一方の手は背中をまさぐるように動くから、身体をぞわり、ぞわりと震えるような快感が走る。

疎い茉莉花にも、彼の気持ちがわかった。

？？私、欲しがられてる。

「はっ」

やっと唇が離されたときには、身体の芯ごと吸い取られたみたいに、ぐにゃぐにゃになって。彼の胸にこてんと頭を預けた。

「ん？　どうした？」

あやすような声。

わかってる、くせに。

「巧……さん」

懸命に頭をもたげて顔をみれば、艶（なま）めかしい熱のこもった眼差しに捕らわれる。

（私も、こんな目をしてるのかな）

？？身も心も、もっと傍で、触れ合いたい。

そんなはしたない気持ちがあふれ出て、今にも知られてしまいそう。

「……行くよ」

巧はふっ、とテーブルのキャンドルを吹き消すと、茉莉花の膝裏に手を入れて、力の抜けた身体を担ぎ上げた。
「きゃっ」
慌てて首に捕まるが、巧は構わず茉莉花を抱いたまま、部屋を横切る。
「行くって、どこへ？」
「どこって……」
巧はふふ、と笑って。
「メモ、見たんでしょ？　僕としてはまさか食事より先に浴室を使ってもらうとは思わなかったけどね。フォルテの匂いがついてやしないかと、そりゃあもう一所懸命掃除して。アロマキャンドル炊いたり、タオルも香りの残る柔軟剤使ったり、必死だったよ」
メモ？　茉莉花は例のリストを頭に浮かべた。

『風呂・寝室掃除、ベッドメイキング』

寝室、ベッド。
意味がわかって、ぼっ、と赤くなる。

「かっこわる。がっついてんのが丸分かりだ。詰めが甘いよね、僕って」
照れ笑いをしながら、茉莉花を抱いて部屋の隅に向かい、キャンドルを吹き消す。
炎が消えると、確認の印のように茉莉花の唇にキスをした。
飾り棚、テーブル……キャンドルを吹き消すたび、キスひとつ。
いよいよ真っ暗になった部屋を出て、寝室へ。
「ドアを開けて、茉莉花。僕、今、茉莉花で手一杯」
甘えるように言うから、つい絆されて。

自分から寝室のドアを開けてしまった。

「Ｇｏｏｄ……ｇｉｒｌ」

満足そうな微笑み。

巧は茉莉花を抱いたまま部屋に入ると、甘いキスを仕掛けながら、片足でぱたん、とドアを閉めた。

ｆｉｎ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5758z/

ハンドラーの彼

2011年12月23日06時52分発行